

# 吉行和子

Kazuko Yoshiyuki



Photo / Ko Hosokawa

芝居というのは、本の中の人物が、  
生きて、動いて、喋っていること

## 劇団民藝入団と初舞台

彼女は不思議な人だ。これまでいつも、その存在が気になっていた。柔らかく軽やかでいながら、揺るぎない存在感と安心感がある。いつもキラキラと輝いていながら、なぜかスツと力が抜けている。少女のような、少年のような、おばあさんのような一度聴いたら忘れない不思議な声。半世紀を超える女優人生の今でも立て続けに映画で主演を張っている。吉行和子さんを知りたい。彼女の不思議さの秘密は一体どこにあるのだろうか？

——女優になるのは子供の頃からの夢だったのですか？

子供の頃は身体が弱くて本ばかり読んでいました。本を読み終わると本の中の人物と話しをするのが、私の一番の楽しみ。そして中学3年生の時に初めて、芝居というものを観て、ハッとしました。本の中の人物が、生きて、動いて、喋っている。この世の中になんにも私を興奮させる世界があったのかと驚きました。それまでは身体も弱かったから、夢など持てませんでした。私は将来劇団に入って芝居を作る一員として生きて行くと決心しました。絵を描くことや裁縫は得意だったから、衣装係のような仕事なら私にもできる。そこで劇団に入るという将来の目標がはっきりと決まったんです。

——劇団民藝に入って、なぜ舞台に立つようになったのですか？

劇団に入るという夢を秘かに思い続けていたら、高校3年生の時に新聞の小さな広告で、劇団民藝が研究生を募集しているのをみつけました。民藝は偶然ながら、私が初めて観た舞台。地味な芝居が多いから衣装もシンプルで、私でも受かるかもしれない。誰にも相談せずに、試験を受けたら、受かった（笑）。衣装係になるつもりでしたが、役者志望の研究生と一緒に芝居の勉強もさせられました。『アンネの日記』の公演の時も、アンネ・フラン

ク役は決まっていたましたが、私も稽古に参加しました。ところが本番の公演が始まったある日、アンネ役の人が風邪を引いて声が出ない。当日の朝、急遽私が稽古場に呼ばれ、舞台稽古もなしに、『アンネの日記』の舞台に立つことになってしまいました。

——何の準備もなく、当日いきなり舞台に上がったのですか？

一ヶ月以上稽古場に一緒にいたら、ひとりでも台詞を全部覚えていたんです。これは行けるということになり、動きだけ教わり、いきなり舞台の明かりの中に出ました。この時に最初に頭に浮かんだことは、嬉しいとか大変だとかではなく、「芝居って変だな」と思いました。新劇の神様と言われていた滝沢修さんは稽古場では目も合わせられない雲の上の存在。ところが『アンネの日記』の舞台の上では滑稽なおじさん役で、私も平気でからかえる。これはとても変な世界だなんて思いました。このことがきっかけになって役者というものに興味が向くようになります。『アンネの日記』は幸いにも好評で、アンネ役が復帰した後も、ダブルキャストになり、私も全国を二年近く回ります。これが私の女優としての原点。思えば、それからもう半世紀以上も女優を続けているんですね。

## 1970年代の演劇界の動きとともに

——劇団民藝時代は演劇界の動きが活発だった頃ですね？

民藝では新劇の名作といわれている久保栄の『火山灰地』や島崎藤村の『夜明け前』など、本当に文句のいえないくらい良い役をいただけていました。一年中芝居漬けの毎日。ところが1970年近くになってくるといろいろな劇団ができて新しい人達が活動するようになり、演劇が変わって来たなあという実感するようになってきました。私はその頃、日活映画などにも少し出てい

# 私は決まってしまうたくない



民藝にいろのはいくらなんでもまずいだろうと思って、劇団の幹部である宇野重吉さんのお宅に夜遅く、「劇団をやめたい」と言いに行きました。宇野さんは凄く悲しそうな顔をされて「せっかくここまでやって来て、これからじゃないか。劇団をやめたら屋根のない家に住んでいるようなものだ」と諭されたんですが、どうしても私はやめたいと言い張りました。翌日は劇団員が全員集まって総会が開催され、私がやめるといったら皆さん本当に驚いて、怒られました。宇野さんが「役者が、自分の本当にやりたいことを見つけて、自分で送ってやるんじゃないか」って言うのは大切なことなんだ。みんな分かってくれた。宇野さんは本当は自分こそ、やりたいことを追求めたかったけれど立場上でできなかったんだと思います。私は今でも宇野さんが大好きですし、ずっと尊敬し続けていきます。そしてここから私の芝居は大きく広がっていきます。次々に新しい人達と舞台を創る機会に恵まれました。

## フィクションの中にある喜び

——舞台、映画、テレビなどで芝居の意識は変わるのですか？

演技をやっていく上で、これは舞台だから、これは映画だからというのではありません。私がここまでやって来られたのは、フィクションというものの中に自分が入れる喜びが私の人生の中で続いているからです。フィクションは、舞台も映画も同じ。もちろんやり方とか目の前に生のお客様がいらっしやるのか、カメラがあるという違い

——劇団には何も相談せずに決めてしまったのですか？

考えてみたら、鈴木さんや唐さん、寺山さん達は、劇団民藝、俳優座、文学座の三大劇団がある限り、日本の演劇は変わらないと新聞などで発言している人達。鈴木さん、唐さん、この二人の芝居をやるんだったら、このまま

——一体誰から送られてきたのですか？

当時、早稲田小劇場を主宰していた演出家の鈴木忠志さんからです。唐十郎さんが書いた『少女仮面』という芝居の台本でした。その台本を見たら、唐さんの手書き。しかも横書きで書かれていてガリ版刷りみたいなペラペラな台本でした。なぜか、私はこのペラペラの紙に唐さんの字で書かれた台本にとっても興味を惹かれます。何か新しい風を私が受けているような気がして、これはこの扉を開けなければという勝手な思い込みがどんどんわき上がってきました。それで鈴木さんに「やりまっす」って返事をしてしまったんです。

# 最後は舞台女優として幕を閉じるのが、私の大切な人生のテーマです



はありますが、私の頭の中では、フィクションの中に今、いるんだということが何よりも大切です。

——台詞を覚える時からフィクションの中に入るのですか？

まずは、とにかくひたすら何度も台本を読み込みます。最初は字も見えませんが、何度も読み込むとページの最初はこういう字だったなって頭の中で字が見えてきます。字が見えているうちはまだダメで、さらに読み込んでいくと、だんだん字が自然と頭の中から消えてくる。そうすると「よしっ」って感じで、初めて舞台に立ちます。頭の中の字が全部消えていると、私はフィクションの中の人となり、自由な気持ちで舞台に立っていられます。

——女優として一番大切にされていることは何ですか？

自分の心が動くということですね。自分の役が面白そうって思えなければ絶対上手くないかない。面白そうならどんな小さな役でもいいし、自分がこの役をやりたいと思ったらやります。長いこと女優を続けているので、役を貰った時に、ああ、この役はこうやってやればできるって想像できてしまうのが一番嫌。いつも初めてやる役という気持ちで演じています。引き出しが多い方がいいと言いますが、私は絶対に引き出しは空っぽにして置いて、いただいた役は初めてという気持ちでいつも持っていたい。どうしたらいいんだろう、とオロオロしていたいんです。私は決まっちゃいたくない。何を考えているのか、わからないって良く言われますが、テーマは何か、レパートリーは何か、という傾向のものやろうとしているのか、という質問をされるとすごく困ってしまう。

私の中ではテーマは何もなくて、お話しをいただいた時に、何か面白そうだなって自分が感じることが、一番大切です。私の中では一つひとつの役を冒険という気持ちでやってきたものから、これだけ長い時間退屈せずに女

優を続けて来られたんだと思います。募ってきた舞台への思い

——一人芝居も面白そうだなって思ったのですか？

舞台の本当の醍醐味を知ったのは一人芝居をやるようになってからです。初めて一人芝居のお話があった時は、まだ渡辺美佐子さんの『化粧』くらいで、私には絶対に無理だっと思っていました。いつもはほとんど即決する私が、かなり悩みました。ところが、絶対に無理だと思えば思うほど、逆をやってみたいという気持ちがふつふつと、わき上がってきました。結局フランスの芝居で『小間使いの日記』という一人芝居を上演して、さらに『MITSUKO』ミッコ世紀末の伯爵夫人』という明治時代にオーストリアハンガリー帝国の伯爵と結婚してヨーロッパに渡った日本人の一人芝居を演じることになりました。

——『MITSUKO』は13年間続きましたね。

スポンサーもなく、呼んでくれる人達がいればどこへでも行きました。いまままで芝居を観たことがないような方々に是非観てもらいたかったので、舞台装置もできるだけシンプルに作りまして、行く先々で初めて生で舞台を観たとすごく感動して、面白がってくれた。舞台と客席とが繋がってみんなを巻き込んで一緒に芝居を進めていく。お客様の熱いものを感じて、私の方が元気をいただき、すっかり一人芝居が病み付きになってしまいました。ヨーロッパ公演にも何度も行くチャンスがありました。そして13年の間に観客が変わる、世の中が変わって行く。それを一人で感じられる一人芝居の舞台に立っていると、舞台というのはこういうものなんだな、役者の醍醐味とはこれなのかというのが、頭じゃなくて身体でわかりました。

——せっかくな面白さに目覚めたのに舞

台をやめると仰いましたね。

出ていく時のワクワクする気持ち、お客様が感動して、とても喜んで下さるのが、ダイレクトに伝わって来る『MITSUKO』の舞台。その醍醐味と幸せを13年間、十分に味わったんだから、まだやれると思う時に、やめておこうかなって思ったんです。そこで『MITSUKO』が終わって、もう一本だけ舞台をやって、私は舞台を降りました。それが4、5年前のことです。幸いなことに最近、映画のお仕事を次々に頂くことができて、充実した日々を過ごしています。私が年を取ってきたのと世の中が高齢化社会に目を向けてきたというところがうまい具合に噛み合ったんでしょね。

——やはりもう映画とテレビだけで、舞台へは立たないのですか？

実は昨年怪我をして、じっくりと自分と向き合う時間がありました。そして、もう一つ舞台をやりたいなっていう気持ちがふつふつとこみ上げてきました。いくつまで生きられるかわかりませんが、台詞が覚えられ、身体が動く間にもう一度、舞台をやるように決めました。何をやるのかというのは決めないで、どんな気持ちになって行くのかなあ、何をやりたいかって自分が思うのになんていうのを焦らずに待たせようと思っています。最後は舞台女優として幕を閉じるのが、最近できた私の大切な人生のテーマです。役者を続けて来たからこそ、私の人生はいつも満たされてきたんだと思います。役者はいくつになってもチャンスがありますからね。思いがけず歩みはじめた道でしたが、素晴らしい出会いをしたのだと、それをいま、心から実感しています。

POLENE 女優、東京生まれ。父エイスケ、兄淳之介、妹理恵は作家。母めぐりは美容師。日本アカデミー賞優秀主演女優賞、毎日映画コンクール田中絹代賞、紀伊國屋演劇賞個人賞など、舞台・映画での受賞多数。映画『愛の亡霊』『折リ梅』『佐賀のがばいばあちゃん』『東京家族』など、テレビでは『3年B組金八先生』『ナースのお仕事』『おちそうさん』などで幅広く活躍中。主演映画『蝶々』『御手洗薫の愛と死』は現在公開中。

ロングインタビュー

# 吉行和子

